様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月　８日現在

機関番号：３４４１０
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008 ～ 2010
課題番号：２０５３０５７８
研究課題名（和文）　獣医師の倫理と安楽死に関する意識調査：飼い主とのコミュニケーションを中心に
研究課題名（英文）　A survey on veterinarians' attitudes toward ethics and euthanasia: Centering on communication with their clients

研究代表者
杉田　陽出（SUGITA HIZURU）
大阪商業大学・経済学部・准教授
研究者番号：６０２６８２９０

研究成果の概要（和文）：全国の臨床獣医師を対象に実施したアンケート調査から、安楽死の年間処置件数、獣医師の安楽死選択の規定要因、安楽死選択の意思決定過程における飼主に対する獣医師のコミュニケーション行動、安楽死処置前後の飼主への動物病院の対応に関する知見を得た。引き続き調査データの分析を進め、安楽死処置をめぐる過程で獣医師が感じるストレスや安楽死に関するガイドライン作成の賛否について明らかにしていく予定である。

研究成果の概要（英文）：The nationwide questionnaire survey of clinical veterinarians revealed the findings concerning the number of euthanasia cases a year, factors affecting veterinarians' approval of euthanasia, veterinarians' communication with their clients in the decision-making process of euthanasia, and support provided by animal hospitals for their clients before and after euthanasia. The further data analysis will reveal findings on stress that veterinarians experience in the process of administering euthanasia and findings on veterinarians' approval or disapproval of setting guidelines for euthanasia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	2,400,000	720,000	3,120,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・社会心理学
キーワード：獣医師、飼主、伴侶動物、安楽死、コミュニケーション、倫理

１．研究開始当初の背景

日本では約 38%の世帯でペットが飼われており、その飼育率は増加傾向にある。しかし、これは、ペットとの死別を経験する飼主の増加をも意味している。飼主が経験するのは必ずしも自然死ではなく、安楽死による死別という場合もある。飼主が最終的な決断を下し、獣医師が処置を行うペットの安楽死には、その意思決定過程において、両者間のコミュニケーションの図り方が重要になると考えられる。

欧米の獣医師会では、処置の方法、処置を行うべき状況、飼主とのコミュニケーションの図り方等、ペットの安楽死に関する諸事項を詳細に規定したガイドラインが存在する。また、処置に際して、獣医師による充分な説明やケアの有無が飼主のその後の精神状態に影響するという研究報告や、獣医師は獣医

療技術の提供だけでなく、飼主とのコミュニケーションに配慮すべきとする論文が多数発表されている。これに対して日本では、ペットの安楽死に関するガイドラインはなく、安楽死選択の判断や飼主への対応は各獣医師の裁量に任されている。このような状況下では、飼主と獣医師の安楽死に関する意識の差や、それによる両者間のコミュニケーションの齟齬が懸念される。

一般的に日本の獣医師は安楽死に消極的であると言われるが、飼主は必ずしも安楽死選択に反対ではないことが判明している（杉田，2008）。しかし、この一方で、安楽死を選択した飼主が深刻なペットロスに陥る事例（新島，2006）や、飼主のペットロスの悪化や回復の遅れの最大要因として、獣医師とのコミュニケーション不足が挙げられるとの調査結果（Kajiwara et al.，2007）が報告されており、安楽死処置をめぐる過程での飼主と獣医師のコミュニケーション不全の実態が示されている。また、安楽死処置やその意思決定に携わる事は、飼主だけでなく、獣医師自身にとってもストレスになることが指摘されている（Kay et al.，1988）。このように、飼主と獣医師双方に重大な影響を及ぼすにも関わらず、日本ではペットの安楽死に関する研究、特にこの重大な影響の要因と推測される両者間の意識の差を調査し、コミュニケーションの重要性や有用性を検証する研究が見落とされている。

獣医療技術の発達によりペットの寿命が延びたといわれる反面、高齢の動物に特有の病気や難病の増加が指摘されている現在、飼主にとってペットの安楽死選択は決して特別な事例ではなく、極めて身近な問題になりつつある。飼主と獣医師の間に存在する問題点を明らかにし、その解決策を検討することは、今後さらに増加するペットの飼主、そして安楽死処置に従事する獣医師の双方にとって、実践に役立つ重要な課題である。このような観点から、本研究では、まず研究事例の少ない獣医師の意識に着目し、全国規模のアンケート調査を行い、ペットの安楽死及び飼主とのコミュニケーションに関する獣医師の意識や行動について検証を試みた。

〈参考文献〉

Kajiwara H.，Nakagawa，M，& Washizu，T.（2007）. An analysis of companion animal death as seen through a pet loss hotline. *11th International Conference on Human-Animal Interactions Abstract Book*, p.60

Kay，W.，Cohen，S. P.，Fudin，C. E.，Kutscher，A. H.，Nieburg，H. A.，Grey，R. E.，& Osman，M. M.（1988）. *Euthanasia of companion animals*. Charles Press.

新島典子.（2006）. 飼主の死生観と亡きペットの存在感：『家族同様』の対象を亡くすとは. *死生学研究*，春号，pp.165-188

杉田陽出.（2008）. 愛着のタイプ及びその度合から見た飼い主のペットの安楽死選択に関する意識：大学生を対象にした調査データを基に. *Animal Nursing*，13(1)，pp.62-74.

２．研究の目的

本研究の目的は、全国の臨床獣医師を対象にアンケート調査を行い、ペットの安楽死及び飼主とのコミュニケーションに関する獣医師の意識や行動について検証することである。具体的な研究課題として、次の点を挙げる。①獣医師の安楽死処置経験とその規定要因、②獣医師の安楽死選択の規定要因、③獣医師が飼主に安楽死選択を提案する際の規定要因、④安楽死処置をめぐる過程で獣医師が感じるストレスとその規定要因、⑤安楽死選択の意思決定過程における飼主に対する獣医師のコミュニケーション行動、⑥安楽死処置前後の飼主への動物病院の対応（獣医師のコミュニケーション行動を含む）、⑦安楽死に関するガイドライン作成の賛否とその規定要因、⑧①～⑦については、欧米との文化的差異の観点からも考察を加える。

以上の研究課題究明のため、調査票には、基本属性に関する設問の他、安楽死の処置経験の有無と年間処置件数、ケース別に見た安楽死選択の賛否、ケース別に見た飼主への安楽死提示の有無、安楽死処置過程で感じるストレス、安楽死の提示や説明時における獣医師のコミュニケーション行動、安楽死処置過程における飼主への動物病院の対応、安楽死に関するガイドライン作成の賛否といった設問を盛り込んだ。

本研究テーマは国民の日常生活に密接していることから、研究成果を学会誌や学会だけでなく、ホームページ上でも発表することを計画している。より多くの国民へ情報発信することにより、飼主と獣医師の双方がお互いの考えや立場について理解を深め、臨床獣医療の現場に役立ててもらうことを本研究の最終目的としている。

３．研究の方法

本研究では、全国規模のアンケート調査を実施し、その調査データを分析して知見を得るという手法を取った。このため、3 年の研究期間において、初年度は予備調査実施と調査票作成と調査対象者抽出、次年度は本調査実施とデータベース作成、最終年度はデータ分析と研究成果発表という研究実施計画を立て、この計画案に沿って以下のような手順で研究を進めた。

(1) 初年度は、調査票で用いる設問と選択肢を検討するため、仮の調査票を用いて、複数の獣医師を対象に予備調査を実施した。この予備調査の結果を検討したところ、現行の調査票では研究課題の究明に不充分な点があることが判明したため、調査票を改良して再度予備調査を実施した。2 回にわたる予備調査の結果を基に、本調査で用いる調査票を作成した。

調査対象者抽出については、当初の計画通り、各地の獣医師会に連絡を取り、名簿の使用許可を得る交渉を行ったものの、許可が下りなかったため、NTT の i タウンページの全国動物病院欄を用いて抽出作業を行うことにした。政令指定都市、その他の市、郡部に分類した 47 都道府県の各地域について、掲載されている小動物対象の開業動物病院数を基に、標本数を比例配分した上で、3,000 軒の動物病院を無作為抽出した。

以上に加えて、調査対象者に本研究の目的を説明し、調査への理解と協力を仰ぐため、また調査対象者からの質問を受け付けたり、調査協力者へのフィードバックを行うため、本研究用のホームページを開設した。

(2) 次年度は、抽出された調査対象者に調査協力の依頼ハガキを郵送後、調査票を郵送するという方法で本調査を実施した。最終的に計 949 の調査票が回収された。宛先不明や閉院等が判明した調査対象者 20 人を除外した回収率は、31.8%である。回収された 949 の調査票の内、「小動物医療に携わっている臨床獣医師」という条件にあてはまらない 17 人が回答したものを分析対象から除外した。よって、今回の調査における有効回答者数は計 932 人である。

回収された調査票から順にデータ入力を開始し、入力完了後にデータクリーニングを行った。こうして完成したデータベースを用いて分析を開始し、得られた知見の発表準備に取り掛かった。

(3) 最終年度は、引き続きデータ分析を行い、得られた知見を国際会議において発表した他、大学論集やホームページ上で発表した。

４．研究成果

アンケート調査で用いた調査票には、安楽死に関する獣医師の意識や、安楽死処置をめぐる過程での獣医師のコミュニケーション行動を多面的に把握するため、各研究課題に沿って作成した設問を盛り込んでいる（「２．研究の目的」参照）。研究課題ごとに順に調査データの分析を行い、以下のような研究成果が得られた。

(1) 「獣医師の安楽死処置経験とその規定要因」と「安楽死処置前後の飼主への動物病院の対応」については、次のような知見が得られた。①安楽死の年間処置件数は、獣医師一人につき平均 2.5 件であり、獣医師の臨床経験年数や勤務する動物病院規模と正の相関関係が見られる。②安楽死処置前に飼主の心理状態に配慮している動物病院は多いものの、処置後に飼主の精神的ケアを行っている動物病院は少ない。③飼主への精神的ケアの有無や頻度には、性別や年齢層といった獣医師個人の属性要因との関連性が見られる。④同意書作成等の安楽死処置に関わる事務手続きの有無や頻度には、病院経営科目の受講経験といった獣医師個人の属性要因の他、勤務する動物病院規模との関連性が見られる。

以上の知見については、平成 22 年 3 月 7 日、ヒトと動物の関係学会において口頭発表を行ったところ、特に安楽死処置後の飼主への精神的ケアの有無に関する知見について、獣医療関係者ならびにペットロス研究者から反響があった。

(2) 「獣医師の安楽死選択の規定要因」については、次のような知見が得られた。①「動物に回復の見込みがない」「飼主が安楽死を望んでいる」の 2 条件が揃った場合に、獣医師は安楽死選択に賛成する傾向がある。②欧米では安楽死選択の条件になりうる「動物に回復の見込みがない」「飼主に治療費の支払い能力がない」「回復後に動物の QOL（生活の質）が落ちる」あるいは「飼主の QOL が落ちている」といった状況下でも、「飼主が治療を望んでいる」限り、獣医師は安楽死選択に反対する傾向がある。③年齢層が高くなるほど、そして自身のペットを安楽死させた経験があるほど、獣医師は安楽死選択に賛成する傾向がある。

以上の知見については、平成 22 年 7 月 3 日、スウェーデンで開催された人と動物の絆に関する国際会議において口頭発表を行い、安楽死に関する欧米と日本の獣医師の意識の違いを提示したところ、欧米の研究者から日本の安楽死事情や日本人の動物観、その文化的背景について多くの質問を受けた。

(3)「安楽死選択の意思決定過程における飼主に対する獣医師のコミュニケーション行動」については、次のような知見が得られた。①コミュニケーションスキル科目の受講経験者は極めて少なく、臨床獣医学におけるコミュニケーション教育の位置付けは低いと考えられる。②飼主との対話において、獣医師は言語及び周辺言語メッセージを重視する傾向がある反面、非言語メッセージの役割や意味に関する認識はやや低く、「コミュニケーション＝言葉のやりとり」という捉え方をしている可能性がある。③共感的コミュニ

ケーション行動を取る獣医師は多く、この点において、多くの獣医師が獣医療面接において理想とされるコミュニケーション行動を理解していると推測される。
　以上の知見については、概要を研究ノートにまとめて大学論集に発表した他、詳細を論文化した上で、平成23年6月19日、日本コミュニケーション学会において口頭発表を行う予定である。

(4) 調査票で用いた各設問の内容と作成目的、集計結果についてまとめたものを大学論集で発表した他、調査協力者へのフィードバックの一環としてホームページ上で公開した（平成22年3月～9月）。

(5) 今後の予定として、「安楽死処置をめぐる過程で獣医師が感じるストレスとその規定要因」及び「安楽死に関するガイドライン作成の賛否とその規定要因」について分析を進め、得られた知見を順次発表していきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
① 杉田陽出、安楽死の提示または説明時における獣医師のコミュニケーション行動調査：設問と回答分布、大阪商業大学論集、査読有、160号、2011、pp.43-58
② 杉田陽出、入交眞巳、ペットの安楽死に関する獣医師の意識調査：設問と回答分布、大阪商業大学論集，査読有、158 号、2010、 pp.103-120
http://ouc.daishodai.ac.jp/data/d0296ab2cc19451f0e4a1008fe53f798/File/15808%E6%9D%89%E7%94%B0.PDF

〔学会発表〕（計３件）
① 杉田陽出、臨床コミュニケーションに関する獣医師の意識調査：安楽死の提示や説明時の場合、日本コミュニケーション学会第41回年次大会、2011年6月19日、西南学院大学
② Sugita, Hizuru、Mami, Irimajiri、Noriko, Niijima、In what situations do veterinarians approve of euthanasia of companion animals in Japan?、The 12th conference of the International Association of Human-Animal Interaction Organizations、2010年7月3日、ストックホルム（スウェーデン）
http://www.manimalis.se/uploads/4c3d5abbc74e04c3d5abbc9041.pdf#page=75
③ 杉田陽出、入交眞巳、新島典子、安楽死処置をめぐる動物病院の飼主への対応に関する調査、ヒトと動物の関係学会第16回学術大会、2010年3月7日、東京大学

〔その他〕
ホームページ等
http://www.daishodai.ac.jp/~harrp

６．研究組織
(1)研究代表者
杉田　陽出（HIZURU　SUGITA）
大阪商業大学・経済学部・准教授
研究者番号：60268290

(2)研究分担者
入交　眞巳（MAMI　IRIMAJIRI）
北里大学・獣医学部・講師
研究者番号：70453511
新島　典子（NORIKO　NIIJIMA）
ヤマザキ学園大学・動物看護学部・准教授
研究者番号：70422350

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：